

濱口恵俊 編著

世界のなかの
日本型システム

新曜社

目次

はじめに 濱口恵俊 i

第一部 日本型システムをどうとらえるか——その比較特性

第一章 日本型システムの成立基盤とその機能・構造的特質 濱口恵俊 三

第二章 「普遍性のイデオロギー」を越えて 長谷川三千子 二二

第三章 普遍的説明と文化的説明 久慈利武 三七

第四章 「文明」の問題と「文化」の問題 梶田孝道 五

——トランスナショナルな諸問題への二つの視角

第五章 日本異質論と日本型ジャーナリズム 柴山哲也 五

第六章 世界の中の日本型経済システム 公文俊平 九

第七章 経済発展の諸段階と社会経済システムの合理性について 中谷巖 二二

第八章 非平衡体系と日本型システム 吉田和男 二五

第九章 科学・技術的側面から見た日本型システム 杉田繁治 一六

第十章 日本型システムとシステムの自律性 鈴木良次 一七

第十一章 メゾ・レベル・システムにおける決定の機能と様式 日置弘一郎 一八

第二部 日本型システムは何を基盤にしているか——その文化特性と多様性

第十二章 外来文明と日本文化 園田英弘 二〇七

第十三章 関係体と仲間意識 米山俊直 二二七

第十四章 多様なモデルの構造的理解 岩田龍子 二三

——日本型システムの位置づけのために

第十五章 アイデンティティの群雄割拠 柏岡富英 二五

——新しい「日本的」伝統の発明に向けて

第十六章 近代日本の「教養」 筒井清忠 二六

第十七章 いらない母のイメージと人生の物語 山田洋子 二六

第十八章 宗教と心理的充足感 金児暁嗣 二〇一

第十九章 日本語表現を通して見た「察しの文化」 佐々木瑞枝 三三

第二十章 日本型学校モデルの現状と課題 恒吉僚子 三五

第二十一章 翻訳文化の象徴としての天皇制 柳父章 三七

第二十二章 ルース・ベネディクトの実像と虚像 ポーリン・ケント 三七

あとがき 濱口恵俊 三九

第十九章 日本語表現を通して見た「察しの文化」

佐々木瑞枝

日本語の表現は外国人には分かりにくいという指摘がよくなされる。しかし、「分かりにくい」という原因をさぐってみると、「分かりにくさ」の大部分は文や語彙レベル、発音や文字体系にあるのではなく、対話相手の日本人の態度に依拠することが多い。

日本人の対話のあり方が、欧米の言語を母語とする人々にとっては異質に映り、「日本社会特殊論」に裏打ちされた彼らの言語観から、「日本語は特殊な言語である」「それゆえに日本人の行動様式も欧米のそれとは異なる」という仮想が成立しやすい。

「印欧語の言語表現では、行為そのものを何らかの主体と結び付けない限り…陳述として提示することができない。一方日本語では、過程 (Vorgang) それ自体としてとらえ、表現するということが行われる」(P. Hartmann, 1982)。

日本語の分かりにくさは主体の意思が文中に現れにくい点だろう。文中に主語が省略されるばかりではなく、文の後半までも省略され、結論の部分を相手の判断に委ねる話法、相槌を打ちながらも、その相槌が受諾であったり

否定であったりする点、文章の最後に付け加える終助詞によって、話者の断定的な表現になったり相手の同意を求める表現になったりする点、曖昧な表現をとることによって自分の主張をやわらげる点、これらはどれも、日本人のコミュニケーションが人間関係によって、そのあり方が変わることを示唆している。これらの用法は、「察し用法」として日本語表現の中で一つのカテゴリーとしての位置を占めてしかるべきであろう。

小論は、「察し用法」の具体例を現代語の諸相から抽出することによって、言語構造と日本人の文化的行動様式の関連性をとらえようとするものである。

1 世代による「察し」用法の違い

言葉は時代とともに移り変わる。日本語も言葉レベルでは方言の消滅と標準語化、外来語の氾濫、音声面ではアクセントの平板化とさまざまな変化が見てとれる。しかし、ここでは現代語を談話レベルでとらえ、「察し用法」の変化について見ていきたい。

日本の社会は高度成長の時期に、農村から都市への一五〇〇万人もの人口移動が起こり、それまでの「村社会」といった地縁、血縁によって構成されていた社会から、「隣は何をする人ぞ」といった個人、あるいは核家族を単位とした社会に変容を遂げた。

村全体が知り合いという村社会における縦横に張りめぐらされた人間関係の組織の中では、対話相手と自分との関係は明白であり、そこで用いられる日本語もお互いの気持ちを察し合って話されることが多かった。

「それではそろそろ……」「そうですね。お構いもしませんで」

対話相手の「帰ろうとしている」「雰囲気を感じて、返答する。「失礼します」の部分が省略されているにもかかわらず、会話がよどみなく進んでいく。

しかし、「相手の気持ちを察する」には、その背後に明確に構築された人間関係が必要で、高度成長以降に生まれ育った若者には、こういった会話が最も苦手なようだ。コミュニティの崩壊によって、情報網が世代間で異なってきた。同じ世代の若者同士の横軸は繋がっていても、世代の異なる人たちとの縦軸は繋がらなくなった。こうした世代間ギャップによって、コミュニケーションの土台となる「共通の前提」が稀薄化してきていると言える。

都心のアパートに住む隣同士で、一方のテレビの音がうるさいとき、ドアをノックし「あのう、テレビの音のことで……」と言えば、高度成長以前に生まれ育った日本人にとっては、その後は言わなくても「あっ、大きすぎましたか。すみません」と会話は続くはずだと考える。しかし、相手に会話の続きを察する能力がないと見た時には、「テレビの音がうるさいですよ」と言い切ってしまう必要に迫られる。意味は簡潔に伝わるが、穏やかに、「円くおさめよう」とする気持ちは伝わらず、隣人同士が絆を断ち切ってしまうことになる。日本語表現には「察し」を必要とする要素が大きいのと言える。

高度成長が、世代間ギャップを生んだと思われる社会現象は数え上げればきりが無いほどだ。一例として電話の普及率を見てみよう。一九五五年には一般住宅で電話を持っている人は八パーセントにしか過ぎなかった。しかし、高度成長の終わる一九七五年には七〇パーセント近くにまで増えている。わずか二〇年の間に、電話の台数は二一七万台から三二〇〇万台まで伸びているのだ。それまでの通信の手段が手紙によって、書き言葉を主体になされていたのに対して、話し言葉である「電話」がその地位に取ってかわった。

電話では手紙と異なり、直ちに答が返ってくる。こうしたコミュニケーションのあり方は、相手の気持ちを察して言葉を選ぶことの重要性を、若い世代にも認識させる結果となったと言える。「もしもし、先日のお受注の件ですが……」(この後、「はい、何でしょうか」というような相手の応答を待って)「実は……」と続ける「察し用法」が「電話のかけ方」として会社の新入社員教育の必須の条件になったのも、いかに「察し用法」が日本社会の中で必要条件

であり、若い世代がそれを身につけていないかの証明となる。

当然のことながら、言葉が変わればジェスチャー・身振りも変化する。「察し用法」が身についた人が公衆電話で話しているのを見ると、相手の姿は見えなくても、その人がどんな立場で相手に話しているのかは、ジェスチャーを見ただけですぐ分かる。お辞儀を繰り返す人もいれば、しきりに頭をかく人もいる。ノンバーバルな部分での観察からも判断が容易だ。

手紙なら、一方的に書くことですね。新入社員教育でも、「手紙の書き方」が「電話のかけ方」ほど重きが置かれていないのは、手紙なら投函する前に修正が可能だが、電話では修正不可能だからであろう。書き言葉では、間も、言葉の省略も、終助詞も、話し言葉のように使われない。なぜなら、相手の様子が目の前にあるわけではないので、その場で即座に判断して返答する必要がないからだ。しかし、電話となると事態は全く異なる。「次の会合はいつにしましょうか」「来週くらいは……」「そうですね。今週は皆さんお忙しいでしょうから」、対話相手をおもくばかり、対話相手とともに会話を作り出していく。そこでは「察しの用法」が縦横に駆使されて、はじめてコミュニケーションが成立しているのだ。

近年、日系企業に多くの外国人社員が入社している。証券会社、メーカー、広告会社などに勤務する外国人社員二〇人にインタビューを試みた結果、「日本語は覚えたが、日本人とのコミュニケーションは難しい」という答えを半数以上の社員があげている。しかし、数年を経た社員の中には「相手の立場になって考えることで、日本語の会話はスムーズにいく」と答えている人もいる。「コミュニケーションが難しい」と答えた外国人の日本語と、「支障ない」と答えた人の日本語は、語彙レベル、発音、流暢さにはほとんど違いがない。それにもかかわらず、一方にコミュニケーション・ギャップが生じるのは、会話のキャッチボールの仕方の良し悪しによるところが大きい。

日本語の会話は「キャッチボールのようなインターアクションである」とよく言われる。文末を自在に変化させ

ながら、相手の様子によって会話を進めていくからだ。相手の気持ちを察すれば察するほど、文章の切り出し方、文の終わらせ方、相槌の打ち方に気を配る。時には文を最後まで言わず、最後の部分は相手に類推してもらって文章が完結するという省略の形が起る。

「相手を察する」日本語の会話は、具体的な人間関係を考慮せずには進められない。日本語の会話では「文の省略」「終助詞の使い分け」「和語・漢語・外来語」などが、ある特定の人間関係で生起する。文法上、問題がないとしても、待遇意識なしに進められる話言葉はコミュニケーション・ギャップが生じるのは当然であり、外国人や日本の社会でも若い世代にこの待遇意識が欠如したところから、コミュニケーション・ギャップが生じるのだと考える。

2 日本人の待遇意識——「長幼関係」と「恩恵関係」のギャップ

日本人の名刺好きは有名だ。なぜ、名刺が必要か。名刺が言葉の「待遇」を決めるからだ。それでは、待遇概念は絶対的なものだろうか、それとも相対的なものだろうか。それは対話相手と立場によって異なる。また、AとBが対話している場合でも、双方が同じ「待遇」の観点で話し合っている場合には、待遇の下の方が上の者に対して「察し用法」を用いることでコミュニケーションはスムーズにいくが、そうでない場合はどうなるのだろうか。具体的な事例で考えてみたい。

たとえば、Aという人間を想定してみよう。Aは現在大企業の部長であり、社会的な地位も高い。会社内では当然のことながら、社員は敬語で彼に接し、社外でも敬語で接せられる場合が多い。相手は自分に対して丁寧な表現を使っても、自分が相手に話しかける時はぞんざいな言葉で接するという状況が普通だとする。

Aには二人の小学生の子供がいて、Aは学校のPTAに顔を出すことがある。子供の担任はAより若いし、社会的な地位も低い。PTAでは当然自分が教師であることから、Aには敬語で接してもらえらるものと思っ

ところがAは、「君、学校の授業の進み具合だがね、うちの子にはよく分かってないようなんだ。もうちょっと面倒見てもらえないかね」と、まるで部下に話す時のように担任に話しかける。担任の教師は不愉快な気持ちを隠しながらAに答える。

こういった場合、Aの意思がたとえ担任への依頼であったとしても、それは非難、詰問と受け取られ、それが人前でなされた場合には「恥をかかされた」ということにもなりかねない。ルース・ベネディクトは『菊と刀』の中で「日本人は恥辱感を原動力とし、人前で恥をかくことをもつとも恐れる」と述べているが、この場合には全くその場面があてはまる。Aはコミュニケーションに失敗したばかりか、伝えようとした内容が相手に誤解して受け取られる恐れさえある。

文意は伝わりながら相手を不愉快にさせてしまっている要因は、「君」という呼びかけと文末表現にある。もしここで「あのう」という呼びかけがされていれば、話を切り出した時の両者のバランスは違ったものになったはずだ。「君」という呼びかけは決して目上の人には使えないこと、「だがね」「なんだ」「かね」という文末表現が敬意を込めたものではなく、同レベルの人間、または目下に対する反論や自分の主張を断定して言う時などに使われることなど、言葉の主要な意味を伝える部分ではないところが、全体のトーンにどれだけ大きな影響を与えるかを示唆している。

呼びかけに際してよく使われる「あのう」には、人間関係を良くする布石としての役割があり、「察し用法」の一つである。「あのう、学校の授業の進み具合ですが……」「言にくいことだが思い切っておこう」といった遠慮の気持ち「あのう」に込められている。

「あのう」には、呼びかけの他にもいくつかの機能がある。

「あのう、明日は都合が悪くて……」（断る場合に使う）

「あのう、〇〇大学の先生でいらっしやいますか」（たずねる）

「この論文はですね、あのう、まだ完成論文ではありませんので」（つなぎ）

これらの「あのう」はどれも話し相手が、「内外関係」で言えば「外」の人、「親疎関係」で言えば「疎」の人、「先後関係」における「先」の人、利害関係のある人、恩恵を感じている人に向けられるものであり、家族に向かつて使われることはまずない。また、独り言で「あのう」が使われることは決してない。話かける場合に何と声をかけるかは日本語には非常に重要で、相手の気持ちを察しつつ話を進めていく中で、いくつものバリエーションに変化していく。

ここで指摘した「君」と「あのう」の使い分けは、テレビドラマ「課長・島耕作」の中に頻繁に表れる。

島 「あのう、来週の出張の件ですが、日帰りする必要がありますので新幹線より飛行機にしたいと思っておりますが……」（上司に対して）

島 「その件はですね、あのう、後日調べた上でご報告に上がりたいと思っております……」（取引先に電話で）

島 「君、コピー五部ずつ頼んだはずだけど……」（女性社員に）

島 「君、悪いけどもう少し仕事残ってるんだよ。先に行ってくれないか」（同僚に）

話しかけ方からしてすでに対話相手との待遇関係意識が顕著なことは、この「島」の例からも見てとれる。

それでは、文末はどうだろうか。Aの担任とのやりとりの文末の部分を変えてみよう。「学校の授業の進み具合ですが……」（相手の反応、または相槌を待つ）、「うちの子にはよく分かっているようなんです」。そして「恐れ入りますが……」などの表現を付け加え、「もうちょっと面倒見ていただけませんか」。

文末の調子を変えることで、同じ内容を述べながら、Aと担任の力関係は逆転する。おそらく、Aがこういう態度で臨めば、担任は自分の優位性を意識しつつ、丁寧にAに接し、コミュニケーション・ギャップも起こらないだろう。

それではなぜ、こういったコミュニケーション・ギャップが生じるのだろうか。その原因は、Aが子供の担任を「長幼関係」という観点から、自分の方が年上だから「待遇が上である」と感じたのに対して、担任の先生は「恩恵関係」という観点から、「自分は年下ではあるが、子供の先生ということから、当然敬意を持って接せられるだろう」と感じたところにある。

「恩」は日本人の関係を繋ぐ重要な要素の一つだが、濱口（一九八八）は「恩はたとえ行為の不確定な交換であるとしても、互恵的な相互性を確保するモラル概念として、大きく寄与するのである。一方的な恩義によって、結果的に当事者間に不均衡な状況が生じようとも、彼らが「間柄」の維持を欲するかぎり、それは決して不自然なものでもなく、また改善されるべき問題だとも思われないであろう」と述べている。

もしAが担任の教師に恩義を感じていれば、それは「担任がAの子供に対して行う一方的な恩義」になり、濱口の指摘通り、問題はない。しかし、「恩」に対する考え方は変わりつつあり、医者と患者、大家さんと店子、弁護士と被告などの関係も「恩恵関係」と見る人もあれば、お金を払ってお願いしているのだからビジネスであり、二人の間にあるのは「利害関係」だととらえる人もいる。

コミュニケーションする相手が、常に同じ待遇関係の観点をとっていけば問題は生じない。文末表現に気をつけると、「察し用法」は整然と行われる。しかし、待遇関係のどの側面を中心に置くかは、暗黙の了解のうちになされるのであり、相互の対人関係のバランス感覚による。先の例は、「長幼関係」と「恩恵関係」の間のギャップだが、「親疎関係」や「内外関係」も、日本語表現においては、文末表現を微妙に変化させる。

ここでは、年長のAに「恩恵意識」が欠落しているという設定をしたが、実際の日本の社会では、以下のアンケート結果にも現れているように、年代の若い一九七五年以降に生まれた人の方が、人間関係をビジネスライクにとらえる傾向が強い。「若い者の口のきき方がなっていない」という言葉をよく耳にするが、これは、人間関係を考える上での、双方の待遇関係の受け取り方の違いによる面が大きいと考える。

「アンケート」

対象 江東区文化センターのカルチャースクールに通う人 98人

回答	10代	20代	30代	40代	50代以上
職業	3名 (男性1)	25名 (男性2)	31名 (男性1)	18名 (男性0)	21名 (男性8)
職業	学生3	職業—学生3、主婦13、会社員7、教員2	職業—主婦28、会社員2、フリーター1	職業—自営業6、会社員3、主婦7、教員2	職業—自営業7、会社員5、会社役員3、主婦6

（江東区は古くからある下町であり、比較的地縁の関係が強が残っている。しかし、高度成長期以降、新しく高層住宅が次々建てられ、地縁関係は崩れつつある）

質問① 次の中から、あなたが恩を感じる対象をあげてください。（複数回答可）

- ・ 大病院の医者（17名）、かかりつけの医者（53名）
- ・ マンションやアパートの管理人（3）、大家さん（16）
- ・ 仲人さん（28）
- ・ 檀家の場合—お寺のお坊さん（35）

・学校の先生（小学校―86、中学校―52、高校―48、大学―15）

質問② ①の人たちに「恩義」を感じる理由、あるいは「恩義」を感じない理由を書いてください。（抜粋）

- ・ 個人病院の場合は家にも診察にきてくれ、個人的な関係が強いが、大病院の医者はあくまで職業として診てもらっているの、恩義を感じる必要はない。
- ・ 大病院でも手術の執刀してもらった場合には、恩義を感じる。
- ・ マンションの管理人は自分たちでお金を払って雇っているので、荷物などを預かってもらうのは当然。
- ・ 大家さんには、何かにつけて世話になる。恩義に感じている。
- ・ 小学校や中学校では、勉強を教わるだけでなく、生活面でもお世話になった。恩義を感じる。
- ・ 教師は勉強を教えるのが仕事であり、別に特別に面倒をかけたのでなければ恩義に感じる必要はない。

アンケート結果には、年代によって「恩恵関係」という人間関係が稀薄になっていく様子が歴然と現れていた。人間関係が稀薄になれば、そこに相手を察して話す「察し用法」も崩れるのは当然だと思われる。

3 「親疎関係」と「内外関係」

もう一つ、典型的なコミュニケーション・ギャップの例を示しておこう。

先のAの家族（Aと妻と子供たち）は、Aの両親と一緒に暮らしている。同じ敷地内に住んでいるが、生活は別々というパターンだ。Aの妻は夕食のおかずを作って、Aの両親のところに持って行く。「まあ、佳子さん、すみませんね。いつも、いつも。佳さんが作ってくださるものは、どれもおいしくて」「いいえ、大したものを作れなくて。今夜のお口に合うかどうか」、義母は丁寧にお礼を述べ、Aの妻は丁寧にそれに答える。結婚以来、このよう

な関係が十数年続いているのだ。

ある日、嫁いだAの妹が遊びに来る。「あら、ありがとう。いつもお前が持ってきてくれるものは本当においしいよ」「そんな、大したものじゃないわよ。今夜のおいしいかどうか分からないわよ」、その会話をそばで聞いていたAの妻は、ふと寂しさを覚える。十数年一緒に住みながら、義母とは交わしたことがない親しげな会話、「おしいよ」「うものじゃないわよ」には内輪の人間の心のこもった話し方があり、自分はいつまでたっても「外」の人間だと感じる。相手に気をつかう「察し用法」が、文末の省略の「て」に現れ、義母も嫁も文章を言い切っていない。文章の後半を相手に委ねることで、毎日顔を合わせながら、いつまでも「疎遠な関係」であり、嫁が「外」の人間であることを感じさせる会話になっている。「内外関係」「親疎関係」が、日本人の言葉遣いを大きく左右している例だ。

人間関係はその他にも、「先後関係」「利害関係」などがある。Aは時々中学や高校時代の同窓会に出席する。学生時代はクラブ活動に夢中になっていた時期があったのだ。卒業して数十年たっても先輩・後輩の関係はなかなか変わらない。職業が何であろうと、地位や立場がどう変わろうと、先輩はいつまでも先輩で、敬意を持って接する相手なのだ。

複雑にからむ糸のような人間関係を一本一本ほぐしていくことで、日本人がどんな場合にどんな風に言葉を使い分け、待遇表現を意識しているのかが見えてくる。

日本語はこうした複雑な人間関係の中で、相手と自分との糸のかけ違いがないように気を配りながら会話がなされる、その重要な部分はこの述べたように「文末の省略」「話しかけの言葉」、またこれから述べる「相槌の打ち方」などによるものだと言える。

4 「相槌の種類」

一口に相槌といっても、その意味・機能は実に多様である。

- ①受諾——「ええ（いいですよ）」「はい（わかりました）」
- ②同意——「そうそう（おっしゃる通りですよ）」「うん（そうだね）」
- ③誘導——「へえ、それで（どうなったの）」（これからどうするおつもりですか）」（アクセントは上昇）」
- ④疑問——「うーん（本当にそうでしょうか）」
- ⑤助勢——「まったく（そうなんですよね）」
- ⑥感嘆——「あらっ（女性）、へえっ（本当ですか）、うそっ（若者言葉）」
- ⑦否定——「いやっ（違いますね）、ううん（そんなこと考えてませんよ）」
- ⑧沈黙——間を置くことが、疑問、否定の役割を果たすことが多い。
- ⑨展開——「それで（どうになりましたか）、それから（どうしたんですか）」（アクセントは上昇）」
- ⑩終結——「それはそれは（大変でしたね）（良かったではありませんか）」

これら多様なニュアンスをもった相槌はつねに相手の気持ちを察しながら行われる。日本語による会話では、他の言語に比べて特に相槌の回数が多いと言われる。相槌を待遇関係という面で見ると、低位の者が高位の者に対して相槌を打つ回数が多いことが、テレビドラマ、小説、漫画の分析などから見とれる。短い言葉にさまざまな機能が込められているという点で、相槌は他者との関係がいかに交わされているかを見、他者と自己との関係をどうとらえているかを示す鍵ともなる。相手との関係が密接になればなるほど、相槌の回数も多くなるという観察もあり、興味深い。

日本語中での「察し用法」は、「自己は常に関係体の中で存在する」という意識によるものだが、こうした事柄は日本人の「文化的な特殊性」というものではなく、人間にとって普遍的な構造であると言える。なぜなら、日本人だけが「人と人との間」を重要と考える行動様式をしているのではないからである。「察し用法」が頻繁に用いられるのは、日本人に主体性がないためではなく、人間関係の中での主体性を第一義的に考えて行動しているからだ、と言える。

「現実の日本人は、集団の中でそれぞれ意思を押し通そうとする欧米型の個体的自律性は示さない。自己依拠的に振る舞う唯我的主体としての「個人」ではなく、既知の人との有機的な相互期待の関係を保とうとして、関連性を常に念頭におく、いわば関与的主体性としての「間人」だと考えるのが妥当であろう」（濱口、一九八八年）。話し言葉における「察し用法」はまさに、日本の社会がさまざまな「関係体」を主軸に動いていることを示すものと言える。

参考文献

- 安藤貞雄「日英語のタイクシス」上下、『英語教育』大修館書店、一九八六年。
 神尾昭雄「情報のなわ張り理論—言語の機能的分析」大修館書店、一九九〇年。
 佐々木瑞枝「日本語の省略」「女ことばと男ことば」『日本事情ハンドブック』大修館書店、一九九五年。
 P. Hartmann, *Einige Grundzüge des japanischen Sprachbaus*, Heidelberg, 1952.
 間宏「高度成長下の生活世界」文真堂、一九九四年。
 濱口恵俊「日本らしさ」の再発見』講談社、一九八八年。
 濱口恵俊編著「日本型モデルとは何か」新曜社、一九九三年。

第二部 日本型システムは何を基盤にしているか

藤本建夫『東京—極集中のメンタリティー—』ミネルヴァ書房、一九九二年。

編著者紹介

濱口 惠俊 (はまぐち えしゅん)

昭和6年 和歌山県生まれ

京都大学教育学部卒業

京都大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学

京都大学教育学部助手・龍谷大学文学部助教授・大阪大学人間科学部助教授・同教授・(国立)国際日本文化研究センター教授を経て

現在 滋賀県立大学人間文化学部教授

(専攻) 日本論・比較文明学・比較社会学・心理人類学

(著書) 『「日本らしさ」の再発見』日本経済新聞社・講談社 (学術文庫)

『日本人にとってキャリアとは』(編著) 日本経済新聞社

『人間主義の社会 日本』東洋経済新報社(サントリー学芸賞受賞)

『日本的集団主義』(共編著) 有斐閣

『高度情報社会と日本のゆくえ』(編著) 日本放送出版協会

『日本型システム—人類文明の一つの型/JAPANESE SYSTEMS—An Alternative Civilization?』(編者代表) 株式会社セコタック

『日本型モデルとは何か』(編著) 新曜社

『日本文化は異質か』(編著) 日本放送出版協会

『日本研究原論』有斐閣 [近刊] など

(訳書) F.L.K.シュー『比較文明社会論—クラン・カスト・クラブ・家元』(作田啓一と共訳) 培風館



世界のなかの日本型システム

初版第1刷発行 1998年3月30日 ©

編著者 濱口 惠俊

発行者 堀江 洪

発行所 株式会社新曜社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

電話 (03) 3264-4973・Fax (03) 3239-2958

印刷 銀河

製本 イマホ製本

ISBN4-7885-0632-7 C3036

Printed in Japan